

## 環境配慮計画を住民の視点から再構築する試み

### — 国営農地再編整備事業 亀岡中部地区 —

Case study which reorganized the environmental conservation plan from the angle of the resident

— Farmland restructuring projects in Kameoka-chubu —

○齊藤 光男・山下博康

○SAITO Mitsuo, YAMASHITA Hiroyasu

#### 1. はじめに

国営事業における環境配慮計画は、学識者等の助言を得ながら、それなりの予算と時間をかけ、「技術的に正しい解」として策定されている。しかし、実施段階になって、「地元の多様な声」との「ズレ」から、具体的な環境保全対策が実現困難となるケースが多く見られる。国営亀岡中部地区では、地元の多様な声を拾い上げるためのワークショップを開催し、地元住民の視点から環境配慮計画の再構築を試みた。その結果を報告する。

#### 2. 亀岡中部地区での取り組み

##### 1) 地区の概要

国営農地再編整備事業「亀岡中部地区」は、京都府の中部に位置する亀岡市の一級河川桂川右岸に位置する6つの地域、444haの水田地帯において、区画整理を行い、生産性の高い基盤の形成を通じて担い手への農地利用集積と食料自給率の向上を図るものである。事業は2014年に着手されており、2023年度の完成を目指している。



図1 排水路の一部を拡幅したビオトープのイメージ (biotope)

本地区における環境配慮計画では、「多様なステークホルダーとの“絆の環”、“共感の環”を形成しつつ、亀岡の歴史風土にあった農地・環境の維持保全活動を展開・促進」するとの基本理念のもと、京都府希少野生生物を含む29種が保全対象種に選定されている。また、それらへの保全対策案として、カエル類の移動が自由にできる皿形水路の設置、排水路を部分的に拡幅して深みと淀みを創出したビオトープの設置、水路落差部への魚道の設置、水路柵への小動物用脱出スロープの設置、工事前の生物の保護移動などが計画されている。

##### 2) 環境配慮を推進する上での合意形成手法

環境配慮を推進する上での課題は、国営事業において実施を予定する具体的な環境保全対策についての地元合意形成を図ること、そして、事業完了後においても地域の手による環境保全活動が継続的に実施されるようにすることであった。本地区では、住民参加型ワークショップを中心として、以下のような意識啓発及び合意形成のアプローチを行うことで、「技術解」に近似した保全対策案を、地域の提案として再構築することができた。

株式会社ウエスコ WESCO Inc.

キーワード：環境保全、ビオトープ、ワークショップ、フレームシフト

- (1) 工区ごとの環境を考える地域団体として「〇〇地域の環境を守る会」を結成。  
各工区の代表者が、参集者を選ぶことから、環境を軸とした人の環づくりを開始。
- (2) 守る会を主催者とした「生き物探検隊」を地域の専門家の協力を得て開催。  
自然と触れあうことを子供たちと一緒に追体験し、環境保全への関心を高める。
- (3) 守る会を主催者とした「より良き環境を未来へ伝えるワークショップ」を開催。  
過去－現在－未来と、時系列で地域のことを話し合い、現状と課題を認識する。  
農業やくらしの変化と、身近な環境の変化には、因果関係があることを学ぶ。  
地域のあるべき未来像は、自分たちの手で選択し、実現すべきことだと気付く。  
上記を踏まえ、地域の未来像（図 2）と、実現のための行動計画を提案する。

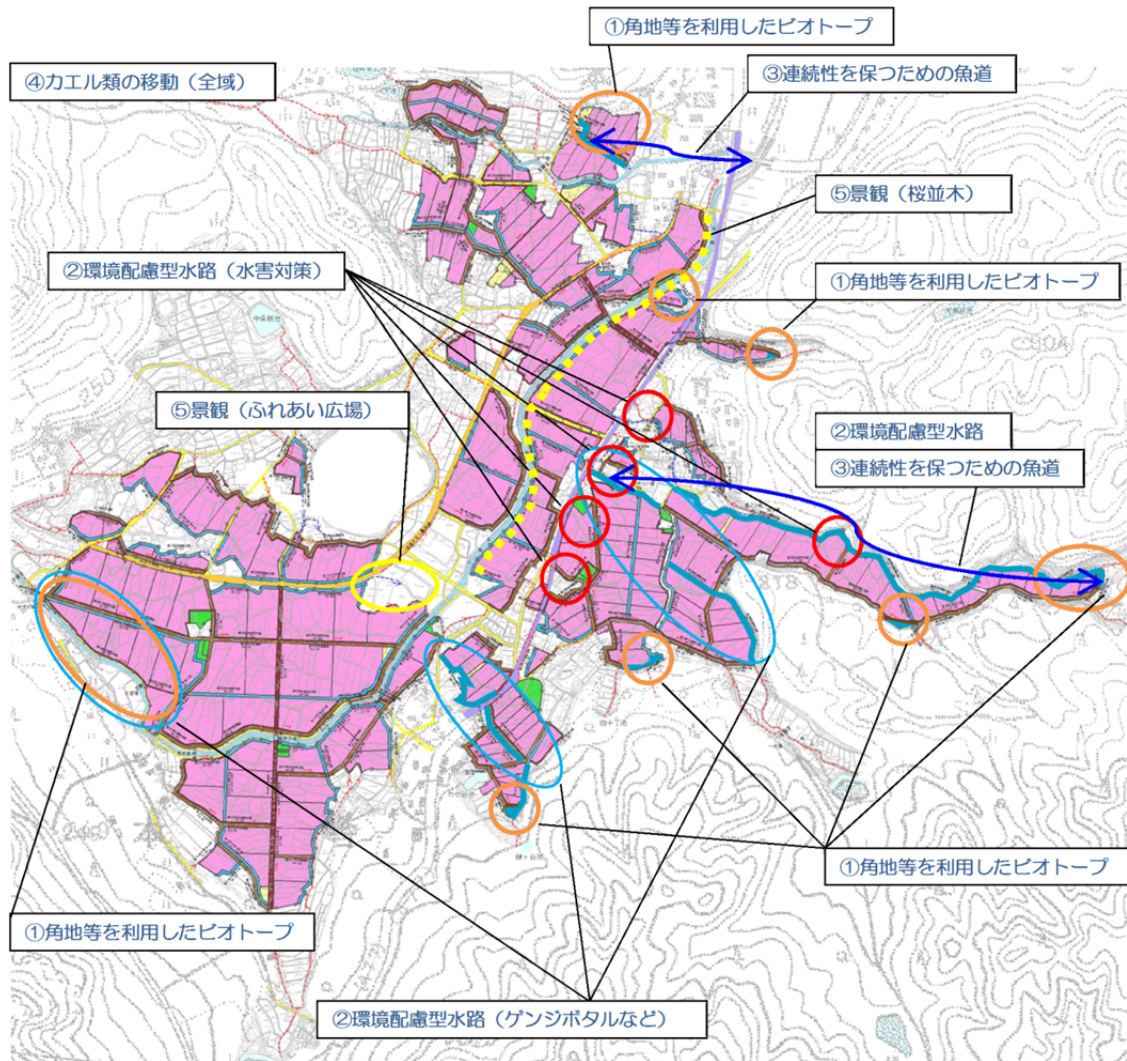


図 2 ワークショップで提案された整備計画案の例  
(Proposed plan in the workshop)

### 3. 合意形成におけるフレームシフトの有効性

地元から多くの提案がなされたのは、環境保全というフレームを少しずらして、ビオトープ等の再定義をしたことが有効だったと考える。例えば、営農上使いにくい角地を使ったビオトープ（図 1）は、大雨時の土砂溜、湧水処理、湧水時の補助水源、手足の洗い場等としても利用できると説明したところ、図 2 のようにビオトープだらけの計画案になった。フレームシフトで地元ニーズに合わせる合意形成手法は、大きな可能性をもつ。